

# 個人における就職の意味

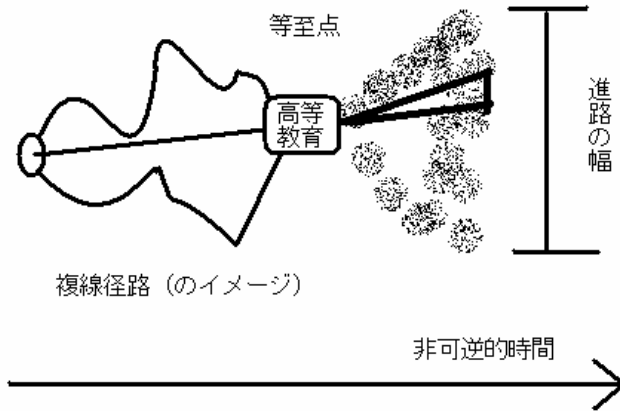
佐藤 達哉 立命館大学 文学部 教授

## [講演の概要]

職業につくことが個人にとって意味することは何か。社会参加、自己実現、様々な意味があるだろう。進路が不自由である時代であれば、不自由であることも気づかずに、職業を通じた社会参加が可能であった。では、自由な進路選択が可能である現代において、個人における就職の意味は何なのだろうか。適性・時間的展望・複線径路といったことをキーワードにして議論を行いたい。

様々な問題をはらんでいるとはいえ、教育年限は長くなり、学校という場所で研鑽し訓練をすることを望む社会の声は大きくなっている。

夜間中学という場において、様々な経歴の人が様々な人生時期において中学校の学習を行っていた。それと同じように、大学や大学院（以下・高等教育と呼ぶ）も、決して最短経路のゴールではなくなってきた。様々な径路を経て高等教育にたどり着くことを、等至点としての大学院と呼ぶ。一方、その等至点を経験した人の進路も単線ではなく、様々な幅を持っている。これを進路の取り得る幅と呼ぼう。医学部の卒業生の進路の幅は狭く、法学部はそうではない。一方で、法科大学院は医学部と同様の機能を持たせようとしたが、現実にはそうならない。



高等教育においては、入り口において様々な経歴の人が入ってきており、出口において自分が思い描く進路を達成できない人が存在している。こうした中で、高等教育機関は、個人における就職の意味を単なる知識習得（それがインターンシップなどを含むにせよ）に矮小化してはならないのではないか。人生径路の複線性や柔軟性を教えることが「負け犬主義」のように捉えられてはならず、就職という節目を自分の人生と真に交錯させるための機会と捉えられるべきであろう。また、高等教育という等至点を通った人が様々な進路を拓けるように社会全体がバックアップすることも重要である。

## [プロフィール]

東京都立大学（博士後期課程中退）。博士（文学；東北大学）。福島大学行政社会学部助教授等を経て現職。専門は応用社会心理学、心理学史。主な著書に『日本における心理学の受容と展開』（北大路書房）『IQを問う』（ブレイン出版）『モード性格』論（紀伊国屋書店；共著）『法と心理学のフロンティア』（北大路書房；共著）『クリニカル・ガバナンス』（至文堂；共著）『水平的社会の構築——ボトムアップ人間関係論の試み』（2007、東信堂；編著）などがある。